

2014年度の活動概要

モチベーション研究所の年次報告書『モチベーション研究』第4号をお届けします。

2014年度も研究所として順調な活動を進めてくることができました。第1には、今年度も引き続き研究所フォーラムを開催することができました。『Well-beingをめざし明日へのモチベーションを育むために』をメイン・テーマとして、これまで3回のフォーラムを開催してきましたが、今年度は10月に第4回として速水敏彦先生（名古屋大学名誉教授・中部大学人文学部教授）をお迎えし、『動機づけの正体—主に感情の役割に注目して—』というタイトルで、先生の長年にわたるモチベーション研究の成果をご紹介いただきました。また、この3月には布川清彦先生（東京国際大学人間社会学部准教授）をお迎えして第5回フォーラムを開催し、『障害者・高齢者の自己実現を支援する—well-beingを支える生活機能、生活機能を支える道具（機器）—』と題してご講演をいただく予定です。

速水先生のご講演内容は本号に抄録を掲載しました。第5回布川先生のご講演については、次号に抄録を掲載する予定です。フォーラムは今後も年2回の予定で開催していきたいと考えています。

第2に、今年度は墨田区教育委員会からの協力依頼を受けて、児童生徒の学力向上に関する研究と実践に着手しました。学力推進に関する会議での角山の講演、竹橋洋毅（本学モチベーション行動科学部専任講師・モチベーション研究所研究員）、小林寛子（同助教）両教員の指導による実践プログラムがスタートしています。

本学は創立以来足立区と密接な連携の下にさまざまな地域貢献活動を進めており、モチベーション研究所も共同シンポジウムの開催などで連携を深めています。さらに地域を広げ、今回墨田区教育委員会との学術的交流と実践の連携を深めていくことで、研究所の活動に新たな途が開けてきたと感じています。今後の成果については本誌でも紹介していく予定です。

第3は、本誌の充実に向けたものですが、編集規程を整備する中で査読制度を導入したことです。審査付きとすることで、投稿いただいた論文の質をさらに高め、一人でも多くの皆さんに研究への関心をもっていただくことを狙いとしています。この制度は、審査者として多くの研究者の協力を必要とします。本誌の発展というだけでなく、本邦におけるモチベーション研究の発展に寄与できるよう、関係の皆様にもぜひご協力をお願いいたします。

モチベーション研究の促進を目指して

少し私自身の話をさせていただきます。私がモチベーションという現象に関心を持ち、研究対象として本格的に取り組み始めたのは20代の後半からでした。かれこれ40年近くになります。大学院時代にLawler, E. E.の「給与と組織効率」（ダイヤモンド社）を、訳者の安藤瑞夫先生のゼミで輪読し、モチベーション現象の面白さと実践的な有用性を感じましたが、さらに助手時代に、当時の恩師からワーク・モチベーション領域で当時の最新理論であった目標設定理論に関する研究を指導いただきました。理論の提唱者であるLocke, E. A.の著書を恩師と二人で翻訳したことをきっかけに、Locke教授とも親交を深め、当時同教授が在職していた米国メリーランド大学でのワークショップに招かれて、各国から集まった第一線のモチベーション研究者と交流するなど、モチベーションに関する理論的研究の先端を走っているような思いで研究に取り組んだあの頃を、懐かしく思い出します。

この時の恩師が今もご健在で、すでに90歳を超えていますが、いまだに海外の最新の研究論文を涉猟し、調査を行い、パソコンを使って高度な統計解析もこなし、さらに英語で論文を書いています。研究意欲の衰えを知らない、ご本人がモチベーション研究の格好の対象となるような先生です。医学の世界でも100歳を超えて活躍されている日野原重明先生のような方がいらっしゃいますが、こうした方たちを見ていると、もちろん身体的な健康に恵まれてのことではあるでしょうが、人の思考力や知への挑戦には限界はないのだということをつくづく感じます。「well-beingをめざし明日へのモチベーションを育む」実践のお手本とってよいかもしれません。

高齢社会が進む現在、高齢者のこうしたさまざまな面でのモチベーションを研究していくことも、これからのモチベーション研究の中で重要なテーマになってくると思います。モチベーション研究所では、定期的なフォーラムの開催や、近隣地域との学術的・実践的交流をこれからも深めていく予定です。同時に、本学モチベーション行動科学部、こども心理学部の教育と手を携えながら、新しいテーマにも積極的に取り組み、モチベーション研究の促進を目指していく所存です。

研究所としての活動も、ようやく軌道に乗りつつありますが、まだまだこれからのところも多々あります。今後とも皆さまのご理解とご支援を賜ることができますよう、よろしくお願いたします。